

1 自然的環境

1) 位置と地形

難波宮跡は、大阪平野の中央を南北に貫く上町台地の先端に位置する。この付近の地質は、中位段丘の上町累層と呼ばれ、砂・礫を主体として多くの貝化石を含んだ海成粘土などで構成されている。これらの地層が約 100 万年前に生じた地殻変動によって隆起して形成されたのが上町台地である。台地の東西幅は約 2,000mあり、最も標高が高い場所が大阪城で海拔約 25m、南に行くにしたがい徐々に低くなり、阿倍野付近で海拔約 15m、住吉区我孫子のあたりで海拔約 10mとなる。

上町台地は、難波宮跡に隣接する大阪城の北側で急激に低くなり、その場所で淀川水系の大川と旧大和川水系の寝屋川とが合流して西流し、堂島川、土佐堀川、安治川、木津川、尻無川と流れ、大阪湾に注ぐ。近世にはこれらの川と繋がる堀川が縦横に開鑿され、今日に繋がる大阪の町割りの基礎が形成された。堀川は戦後の高度経済成長期に多数埋め立てられ、高速道路などに姿を変え、今では東横堀川と道頓堀川を残すのみとなっている。

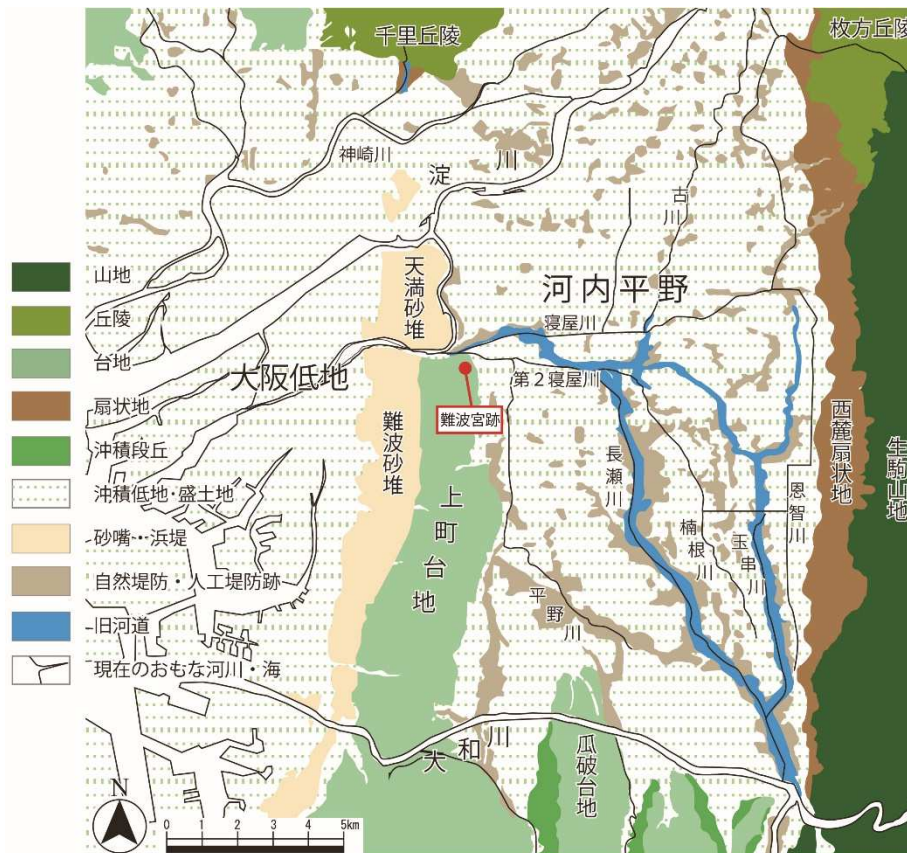


図3 大阪平野中央部の地形分類図（建設省国土地理院 1965 をもとに一部加筆）

台地の西には大阪湾の湾岸流によって形成された標高 2~5mの難波砂堆とその北に形成された天満砂堆が伸び、これらの砂堆の位置は、豊臣期に城下町が形成される範囲とほぼ一致している。一方、台地の東に広がる河内平野は、今から約 7,000 年前の縄文時代前期には大阪湾と繋がる内海であったが、その後の海水面の低下と旧大和川水系の河川が運ぶ土砂によって陸化がすすみ、約 2~3,000 年前に潟に、1,700 年前頃には淡水の湖に変化したと考えられている。このように大阪の発展は、上町台地と淀川水系や旧大和川水系などの多数の河川が織りなす自然とそれに働きかけた人々の営みによって形成されてきたといえよう。

## 2) 景観

都市大阪の歴史は、上町台地上につくられた5世紀の倉庫群（法円坂遺跡）とそれに続く飛鳥時代・奈良時代の難波宮に始まり、瀬戸内海や淀川の水上交通と共に発展をみた。都市としての景観も難波宮とそれを起点に南へと伸びる難波京朱雀大路跡、そのまわりに配された四天王寺や条坊を持つ難波京に遡ることができる。この上町台地を南北に結ぶラインは中世の熊野街道に引き継がれる。それを受けて、豊臣秀吉の大坂城築城と城下町の建設により今日残る町割りの基礎が完成する。この城下町建設のなかで、上町台地上には四天王寺に続く寺町と町屋が、台地の西には船場が、北には天満の町

が形成された。江戸時代になると豊臣時代の船場を西と南に拡大するよう多数の堀川がめぐらされ、その水運を利用して中之島の蔵屋敷群や、堂島米市場がおかれ、全国の物資の流通拠点となった。

近代になると、都市計画に基づく道路、鉄道、港湾、公園などの社会基盤の整備がすすみ、都市の緑化、建築物やまちなみの整備など、多くの分野で市民、事業者と行政が一体となったまちづくりがすすめられてきた。町人の町であった船場、徳川期の武家屋敷を踏襲して軍や公共施設が多数を占めた大阪城周辺地域、官営工場が建設された天満など、徳川期の町割りを踏襲しながら各々独自性のある町が形成された。

難波宮跡周辺域は、今日の大阪の中核となっており、高度な土地利用がなされる一方で、大阪の歴史を伝える歴史資産や開放的な水辺などが調和し、豊かな都市景観を形成している。特に、難波宮から大阪城を見通すビスタ（見通し線）は、かつての城下町から大坂城天守を見通す景観を想起させ、城下からの景観演出の機能をうかがうことも可能である。ただ残念なことに、このような歴史的な景観も難波宮跡を分断する阪神高速道路が計画地の景観阻害要因となっている。



図4 古代の上町台地（趙ほか 2014）

## 2 難波地域周辺の歴史

### 1) 難波宮以前の上町台地

難波宮が立地する上町台地は大阪平野の中を南北に延び、現在の大和川から大川（旧淀川）まで、南北約 11km、東西 2~3km の細く長い地形をしている。北端部の大阪城付近が最も高く標高は TP+25 m で、南に向かって徐々に低くなり、住吉大社付近で TP+10m 前後になる。西は急峻な海食崖であるが、東斜面は緩やかに下がり河内低地に漸移する。台地内部には開析谷が多く入り込んでおり、起伏にとんだ地形となっている。台地北部には遺跡が集中し、難波宮跡のほかにも、森の宮遺跡や宰相山遺跡、上本町遺跡、大坂城跡など、大阪の歴史を物語るうえで重要不可欠な遺跡が分布している。

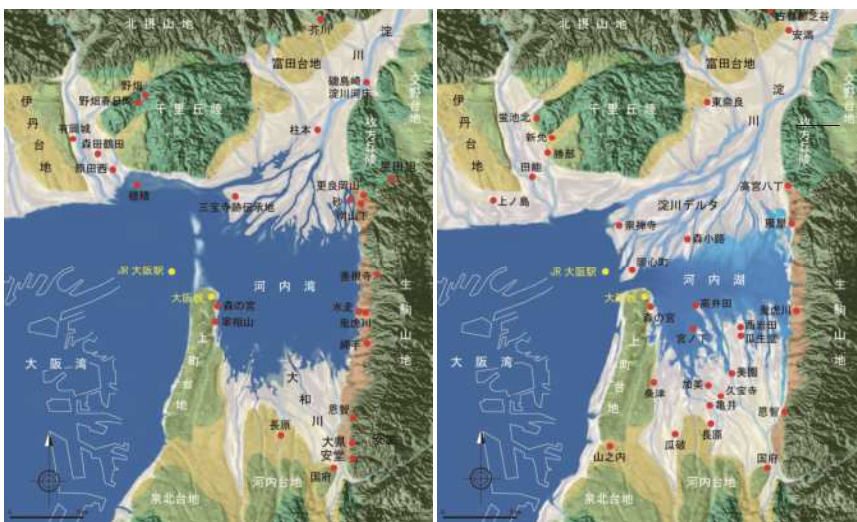
上町台地の東側にある河内平野（河内低地）は、旧石器時代は古河内平野とよばれる平野であったが、最終氷期が去り気候が回復し始めると海面は徐々に上がっていき、約 8,000 年前の縄文海進期には河内湾となった。上町台地の西海岸は外湾に面した崖となり、台地は細長い半島状になる。



古河内平野から河内湾の時代（約 9,000 年前） 河内湾Ⅰの時代（約 6,000 年前）



宰相山遺跡出土の縄文土器  
縄文時代早期末（約 7,000 年前）の  
茅山下層式ないしは粕畑式（高橋 2018）



河内湾Ⅱの時代（約 5,000 年前） 河内湖の時代（約 2,100 年前）



森の宮遺跡の貝層

図 5 上町台地周辺の古地理変遷（大阪市文化財協会編 2008）と難波宮以前の上町台地

その後、海岸線の後退と淀川や大和川の河口の前進で、河内湾は徐々に縮小し、河内潟の時代を経て、弥生時代中期頃までには淡水の湖、河内湖となる。上町台地上で見つかった最も古い人間活動の痕跡は、台地西側にある宰相山遺跡出土の縄文時代早期の高山寺式土器である。宰相山遺跡では縄文時代早期末～中期初頭の土器(図 5 右上) やサヌカイトの破片も出土している。同じく上町台地西側の勝山遺跡においても、縄文時代早期～前期初頭の土器が見つかった。この頃、河内湾に面した上町台地の高台で人々は活動を開始したようである。

また、上町台地の北東端の斜面にある森の宮遺跡では、縄文時代中期以降人々の居住が始まり、縄文時代後期から弥生時代中期にかけて大規模な貝塚を形成するようになる。東西 30m、南北 100m の西日本最大級とされる森の宮貝塚である(図5 右下)。森の宮貝塚は縄文時代後期の貝層はマガキを主体とするが、縄文時代晩期～弥生時代中期の貝層はセタシジミを主体としており、遺跡の周辺環境が河内湾から河内湖へと変遷するようすを反映している。そのほか、河内湾・河内湖を取り囲む位置に立地する森小路遺跡や同心町遺跡では弥生時代の集落跡が見つかった。

## 2) 難波宮下層遺跡群

上町台地上で本格的な開発が始まるのは古墳時代以降である。古墳時代中期を起点に、難波宮が建設される 7 世紀まで、継続して竪穴建物や掘立柱建物が発見されている。これらの難波宮造営前の遺構を総称して「難波宮下層遺跡群」と呼ぶ。

その中で、特に注目されるのは法円坂遺跡の建物群である(図 6)。現在の大阪歴史博物館とNHK大阪放送会館とが建つ敷地において、計 16 棟の掘立柱建物が東西 2 群に分かれて整然と並んで発

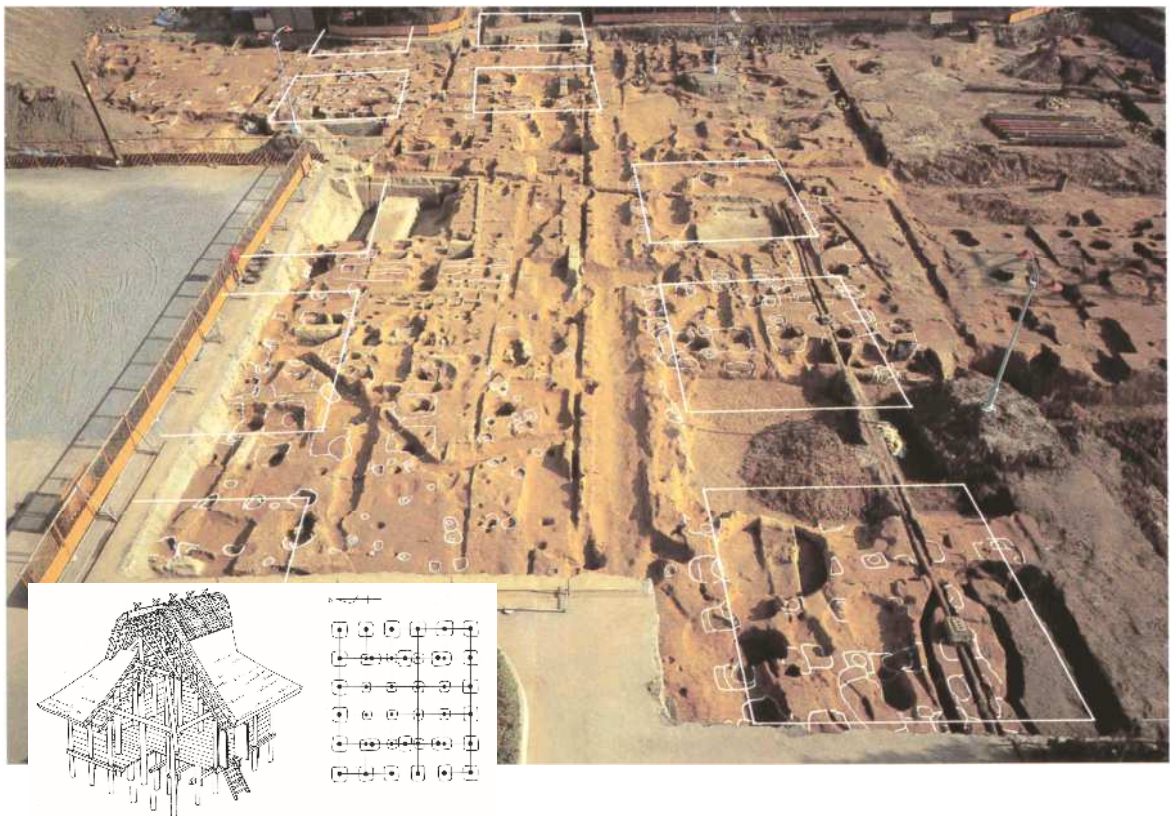


図 6 法円坂遺跡倉庫群と同復元建物 (大阪市文化財協会 1992)

見された。建物はいずれも 5 間×5 間の  
 総柱高床式建物で、東西約 10m、南北約  
 9m、床面積 90 m<sup>2</sup>の同一構造・同一規模  
 で、正方位に並ぶ。この建物群は一部が  
 5 世紀後半の竪穴建物に壊されており、  
 柱穴や周辺から出土した須恵器の型式と  
 もあわせて 5 世紀前半頃の建設と考えら  
 れている。これらは古墳時代における突  
 出して大規模な倉庫群である。瀬戸内海  
 を経て、大陸へと通じる畿内への玄関口  
 ともいえる場所に立地することからも、  
 倭王権が直接管理するものであったと考  
 えられている。

また倉庫群の北 700mには現在の大川  
 がある。このころ河内湖は旧淀川・大和  
 川が運ぶ土砂により徐々に埋まり、排水  
 不良の湿地帯となっていた。『日本書  
 紀』卷十一仁徳天皇の条には、湿地帯と  
 大阪湾をつなぐ「難波堀江」を開削した  
 と記されている。この難波堀江付近に倭  
 王権の港である「難波津」があったとさ  
 れ、大規模倉庫群は難波津と関連する施  
 設と考えられている。

倉庫群はその後建替えられることなく  
 廃絶するが、廃絶後の 5 世紀後半～7 世紀  
 にかけても周辺では掘立柱建物が継続し  
 て見つかっている。建物群は 60 棟を超  
 え、6 世紀末～7 世紀初頭の推古朝でピー  
 クとなり、東西 1km、南北 1.5km に集中し  
 ている (図 7)。いずれも後述する難波宮  
 期の建物とは異なり、正方位をとらない建  
 物の配置となっている。『日本書紀』には  
 「難波大郡」、「小郡」、「館」、「難波屯倉」  
 などの外交・行政施設が置かれていたと記  
 述がある。難波宮下層遺跡の建物群はこう

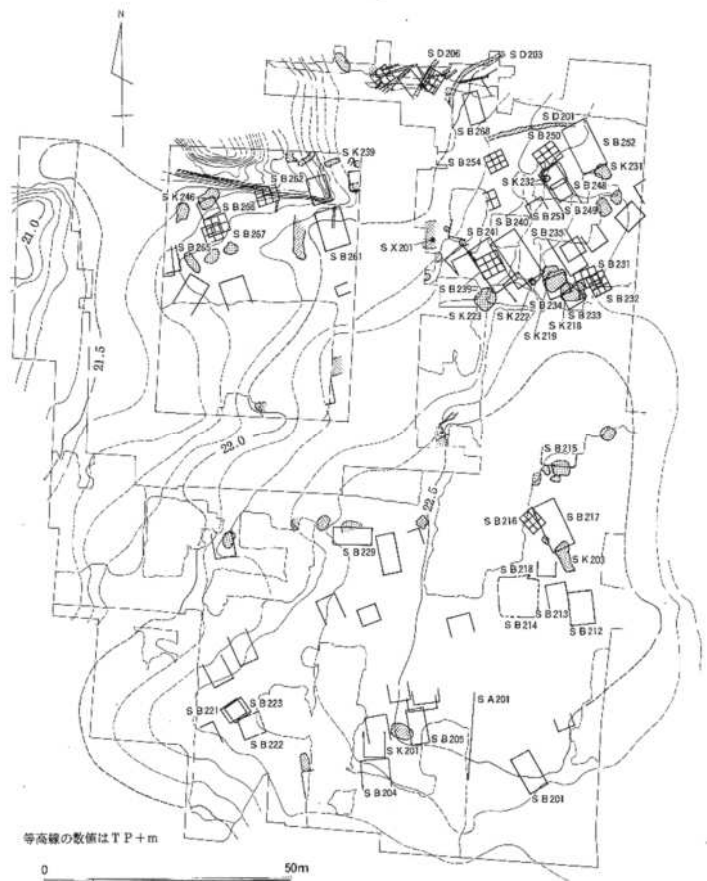


図 7 法円坂遺跡倉庫群廃絶後の建物群 (6～7 世紀前半)  
 (大阪市文化財協会 1992)



図 8 ガラス小玉の鑄型と百済土器  
 (大阪文化財研究所 2012・大阪市文化財協会 2004)

した諸施設に関係するものと考えられている。

また、上町台地北部のより広い範囲でも建物群や土壌が検出されている。これらの建物跡や土壌、また埋没谷を埋める地層からは、初期須恵器や韓式系土器、また百濟土器や新羅土器といった外来系土器が出土する（図 8 右）。さらに上町台地上の開析谷の一部である上町谷の上流部斜面では、初期須恵器を焼成した 5 世紀代の窖窯である上町谷窯 1・2 号が見つまっている。難波宮跡公園の南東部の竪穴建物や東部の谷からはガラス小玉やガラス小玉の鋳型（図 8 左）、鍛冶に伴う鉄滓や鞆羽口なども出土するなど、渡来人や渡来系の工人との関わりを示唆する遺物が多く出土している。



図 9 置塩章（左）と山根徳太郎（右）  
昭和 41 年（1966）撮影（大阪歴史博物館 2014）

### 3) 難波宮

難波宮は、『日本書紀』に記された大化元年（645）12 月の難波遷都から長岡京遷都（784）の頃まで約 150 年間、首都あるいは副都として、我が国の古代史上に大きな役割を果たした宮殿遺跡である。

その所在については長年わかっておらず、江戸時代以来、論争が続けられていた。大正 2 年（1913）、当時陸軍の建築技師であった置塩章により大阪被服支廠（中央区馬場町）の建築現場から奈良時代の軒瓦が発見された。これが遠因となり、さらに昭和 28 年（1953）に中央区法円坂一丁目から奈良時代の鷗尾片が発見されたことが直接の契機となって、翌 29 年（1954）、山根徳太郎により鷗尾発見地点の周辺から発掘調査が開始された（図 9、10）。

以降、今日まで 60 年以上にわたり継続される調査・研究によって、前後 2 時期の宮殿遺構が中軸線をほぼ同一にして、同じ場所に重複して造営されていたことが明らかとなった。下層にある飛鳥時代の古い遺構群を前期難波宮（7 世紀）、上層にある奈良時代の新しい遺構群を後期難波宮（8 世紀）と呼んでいる（図 11）。



図 10 難波宮出土瓦（大阪市指定文化財）

上左：重圏文軒丸瓦・上右：蓮華文軒丸瓦（大正 2 年（1913）出土）  
下：鷗尾（昭和 28 年（1953）出土）

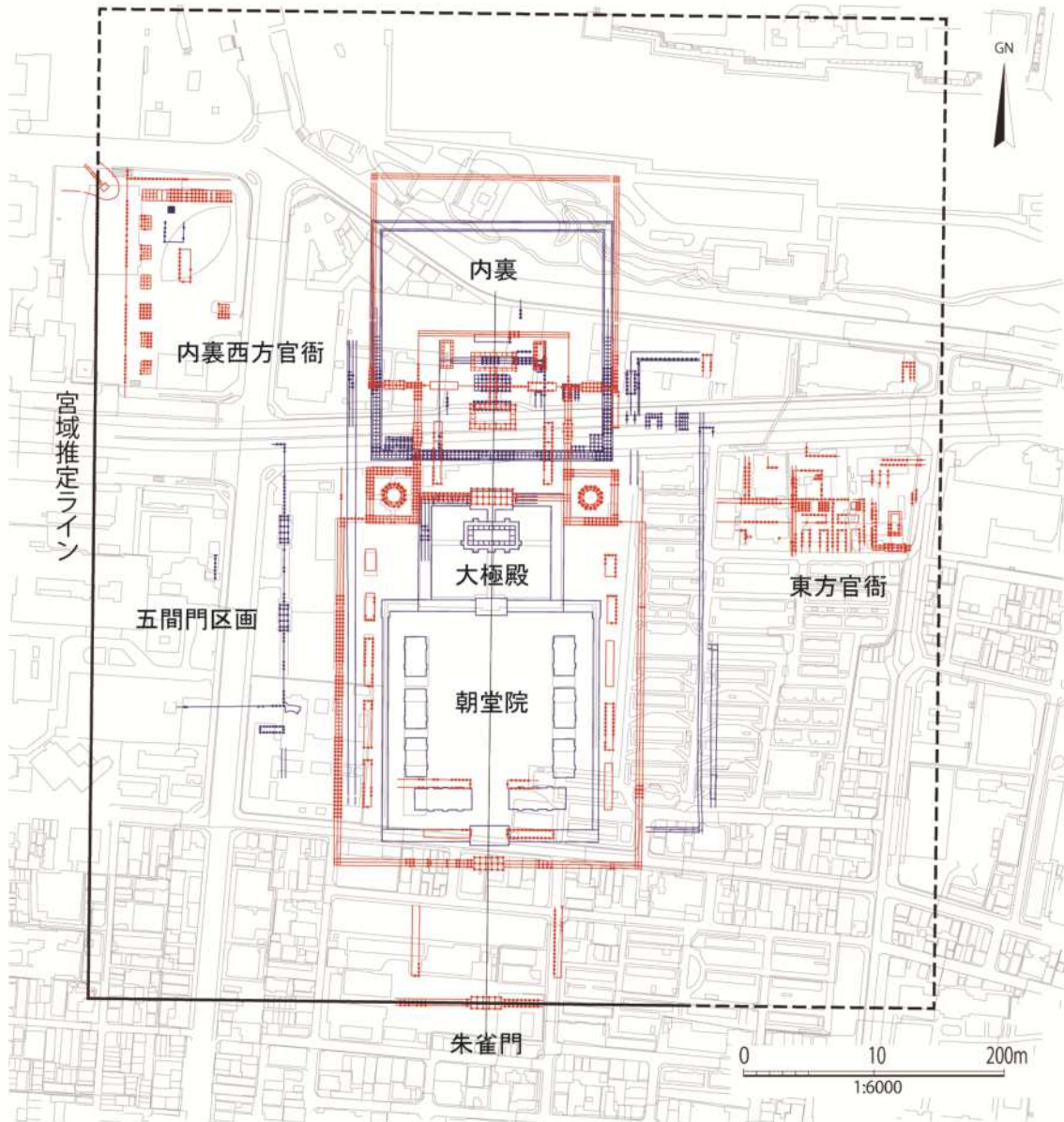


図 11 難波宮殿舎配置図 (※赤：前期難波宮 青：後期難波宮を示す。)

### ①前期難波宮の宮殿中枢部

前期難波宮は、孝徳天皇によって白雉元年（650）頃に造営が開始され、朱鳥元年（686）に焼失した「難波長柄豊碕宮」と考えられている。建物はいずれも掘立柱形式であり、屋根は板材や檜皮葺であったとされる。発掘調査では柱穴の抜き取り痕からはしばしば焼土や炭片が検出され、火災の痕跡が確認されている。

「大化改新」により都を飛鳥から難波へと遷した孝徳天皇は、政治体制の中央集権化を図り、そのシンボルとして大陸風の宮殿を建設する。こうしてつくられた前期難波宮は内裏・朝堂院から宮城南門に至る中心部とその東西の官衙からなる。その規模は、東西 650mほどで、南北はさらに長い可能性があるなど、これまでにない大規模なものであった。また従来飛鳥に築かれてきた宮殿とは異なり、唐長安城の宮殿設計を取り入れ、内裏から南へ延びる軸線上に左右対称に宮殿を配置し、建築に際しても、唐の尺に近い基準尺（1尺=29.2cm前後）が採用されている。



図 12 宮城南門(朱雀門) (大阪市文化財協会 2004)



図 13 東方官衙地区 (大阪市文化財協会 2004)

現在の難波宮跡公園に位置する宮殿中心部は、北から内裏と朝堂院、宮城南門（「朱雀門」）が中軸線上を同一にして左右対称に配置されている。藤原宮以降の殿舎配置に共通してみられる内裏・朝堂院が分離した形態とは異なり、両者は左右に曲折する複廊で囲まれていて連続している。内裏と朝堂院は内裏前殿区画によって接続され、区画内部には、軒廊で繋がれた内裏前殿と後殿が配置される。内裏前殿の南には桁行 7 間の内裏南門があり、その両側には複廊で囲まれた東・西八角殿が並び立っていた。八角殿がどのような用途に使用されたのか明確でないが、外観上宮殿の中心部を荘厳化する目的があったと考えられている。

内裏南門の南は朝堂院区画である。朝堂院は 14 もしくは 16 棟に復元され、南に桁行 5 間の朝堂院南門がある。前期難波宮の朝堂院は、藤原宮以降に続く 12 朝堂形式と異なること、規模・規格において第一堂と第二堂を他と比べて特別な扱いとしていること、なかでも第一堂をより優位に位置付けていること、全体の配置計画より判断して第七堂の両側にさらにもう一棟ずつ置かれていた可能性があること、などが注目される。朝堂院区画のさらに南 100m のところには宮城南門、いわゆる「朱雀門」がある（図 12）。「朱雀門」の東西に

のびる宮殿の南限ラインは複廊及び一本柱塀で区画され、内部には朝集殿とみられる建物跡が検出されている。「朱雀門」の南側では埋没谷とその谷を埋める整地層が見つかっており、前期難波宮の造成に伴って谷を埋め立てたようすがわかっている。



## ②前期難波宮の東方官衙

難波宮跡公園の東側 200mのところには、正方位に並ぶ建物群が見ついている（図 13）。遺構は大きく西、中央、東の 3 区画に分かれる。それぞれが回廊や塀によっていくつかの小区画に分かれる。西区は直行する塀および回廊（単廊）によっていくつかの区画に分かれる。中央区は南半部に、掘立柱塀によって区画されたなかに、高床式倉庫と複数の側柱建物が配置されるという類似の区画が 2 つ並んでいる。この両区画の遺構はさらに南側に広がっている。北半部は塀による小区画があるが、詳細はわからない。これらは前期難波宮の実務を担当する「曹司」と考えられ、東方官衙と呼ばれている。前期難波宮の段階で官衙が形成されていたことがわかり、わが国の古代国家形成を考えるうえで非常に重要な遺構といえる。

東区は五間門を伴う回廊で区画され、石敷を巡らせた中に「楼閣風」の建物を備えた空間が検出されている。この施設は単なる官衙などではなく、極めて格式の高い空間と考えるべきといえる。東側に広がる内海の眺望を楽しみ、宴会などをおこなう施設で、史料にみえる「濱臺（はまだい）」のようなものではないかという説がある。

このさらに東側には埋没谷があり、焼失した前期難波宮の壁土が大量に投棄されていた。壁土には白土を塗ったものもあり、前期難波宮の宮殿には白壁の建物があったことが判明している。

## ③前期難波宮の内裏西方官衙

現在の大阪歴史博物館・NHK大阪放送会館の敷地でも、整然と並ぶ前期難波宮期の倉庫群が確認されている（図 14）。この内裏西方にある倉庫群は、南北に並ぶ 6 棟以上の総柱建物と 1 棟の掘立柱建物を配置したもので、倉庫とその管理棟と考えられている。最も北にある総柱建物は、3 棟の倉庫に連続した屋根をかけた並び倉とみられ、正倉院正倉を桁行方向に拡大したような特殊な構造の宝物庫とみられる。この倉庫群は北側と西側を一本柱塀で区画され、西側塀のさらに西約 24m の位置にも南北方向の塀がある。また、西北角には石組みの水利施設も確認されている（図 15）。

この内裏西方官衙は大規模な倉庫が計画的に配置されていることから、『日本書紀』天武天皇朱鳥元年（686）の火災記事にみる「大蔵

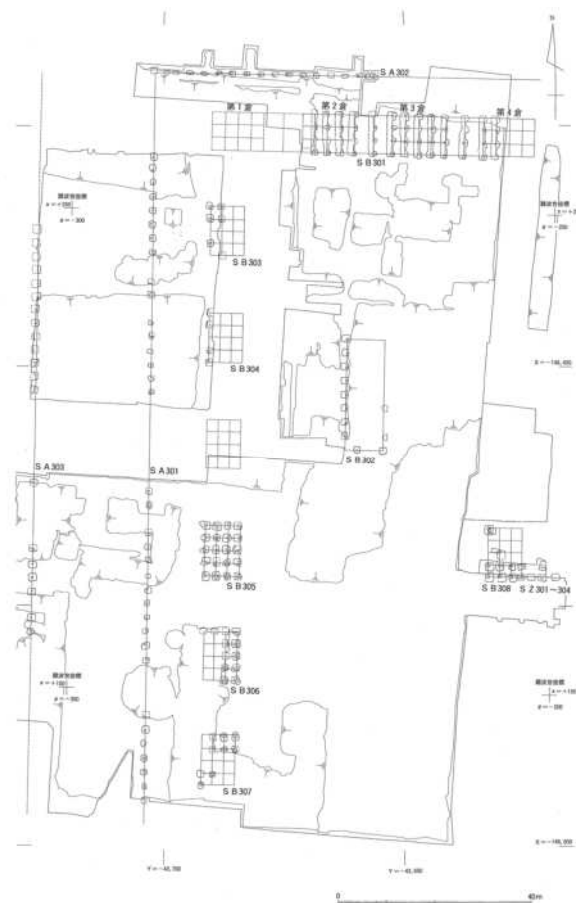


図 14 内裏西方官衙（大阪市文化財協会 1992）

（並び倉の第 1 倉は、その後の検討により存在しなかった可能性が指摘されている。）



図 15 水利施設（大阪市文化財協会 2000）

省」にあたると考えられている。また持統天皇 6 年（694）に記載のある「難波大蔵」との関係も注目される。

#### ④前期難波宮の宮域

前期難波宮の宮域（図 11）のうち南限は「朱雀門」およびこれの東西に連なる複廊、一本柱塀である。西限については、先に記した内裏西方官衙を区画する塀のさらに西方約 24m のところに位置する南北塀がこれにあたる可能性が高い。より西側にも難波宮期の遺構が発見されている個所はあるが、その性格は明確でない。この西限を区画する塀が難波宮中軸線から西へ約 307m の位置にあったと考えられる。一方、東限は不明確である。現在のところ中軸線より東へ約 320m の位置で東方官衙の遺構群が発見されているが、その南東にある谷は埋め立てられてはいなかった。東限はこの谷の手前、遺構群の東側あたりと考えられる。

そうすると中軸線を挟んで東限が長くなり、東西方向については非対称であった可能性もある。

北限も明確ではないが、大阪府警察本部敷地の調査で発見された東西方向の柱列がこれにあたる可能性が高い。この北側には北西方向から谷筋が入り込んでいる。なお、谷の底からは 7 世紀中頃～後半の大量の土器と 648 年と推定される「戊申年」銘の木簡などが出土している。前期難波宮の建設が孝徳期（645～654 年）であることを示す史料として注目されている。



図 16 後期殿舎の屋根を飾った重圏文軒瓦（大阪市文化財協会提供）

#### ⑤後期難波宮の中枢部

後期難波宮は、前期難波宮と中軸線をほぼ同じくして設計された奈良時代の宮殿遺構である。『続日本紀』に神亀 3 年（726）に聖武天皇によって造営が開始されたと記される「難波宮」と考えられている。後期難波宮は、大極殿院や朝堂院などの宮殿中心部の建物を瓦や礎石を用いた大陸式の建築様式で飾る（図 16）。内裏は東西 180m の区域を掘立柱の複廊で囲み、その中央南半部を区画しその中に掘立柱形式の内裏正殿と前殿を置いている。



図 17 後期大極殿跡（大阪市文化財協会提供）

その南側に位置する大極殿院の中央やや北寄りに建つ大極殿は基壇の規模や階段の位置から推定して、桁行 9 間、梁間 4 間に復元されている。屋根は瓦葺で、凝灰岩で外装された高さ 2m の基壇上に建っていたとされている（図 17）。大極殿は軒廊により後殿と連結しこれに回廊が直接取り付く形態は、平城宮の第 2 次大極殿上層遺構と同様のものであり、相互の関係が注目される。

朝堂院は 8 棟の朝堂を配置する構造である。第一堂から第三堂を南北棟とし、その南側に置いた第四堂を東西棟とする形態は長岡宮の朝堂と同様であり、建物規模も等しい。朝堂院の南側で発見されている東西溝の位置や瓦の出土から、この位置に朝集殿院が想定される。

大極殿院の西方には、南北約 200m の範囲を掘立柱塀で囲んだ区画がある。三等分する位置に桁行 5 間の門が開いているが、五間門は最上級の格式をもつ形式であることから、この区画はかなり重要な意味をもつことが推測される。

#### ⑥後期難波宮の官衙

一方、大極殿院の東方では築地で囲まれた 2 つの区画施設が南北に並ぶ。北側の区画は南北約 120m、東西約 85m、内部は石敷で、礎石建物の基壇の一部が見つまっている。その南は幅約 20m の宮内道路となっており、道路を挟んで南側の区画となる。南側の区画は規模不明であるが、石敷と建物の基壇が見つまっている。昭和 28 年（1953）に難波宮発掘調査のきっかけとなった嶋尾はこの南側の区画からの発見であった。両区画ともに石敷を伴う大規模な殿舎があったと考えられ、ここにも格式の高い重要な施設が存在したと考えられる。その性格としては、天平 16 年（744）の難

波遷都に伴う元正太上天皇宮、天平勝宝 8 年（756）の孝謙天皇の「東南新宮」、あるいは上級官衙である可能性などが指摘されている。

後期難波宮は、桓武天皇の時代に長岡京遷都に伴い解体され、建築資材は長岡京へ運ばれた。桓武天皇は、延暦 12 年（793）3 月 9 日の太政官符で「撰津職」を改めて「撰津国」にすることを勅し、以降、「難波」が正史に登場する回数が激減する。

#### 4) 中世～豊臣期



図 18 難波宮跡出土の金箔瓦（大阪市文化財協会 1990）

平安時代以降、室町時代に至るまで難波宮周辺の調査では、しばしば耕作土層が検出されることから、当時は田畑が広がる景観となっていたようである。一方で四天王寺詣や高野山参詣、熊野詣など寺社参拝が盛んになり、淀川を船で下った京の貴族たちは、難波の渡辺（窪津）より上陸し、上町台地西側の渡辺王子・坂口王子を通過して、熊野街道沿いに四天王寺や高野山を目指していった。「蟻の熊野詣」と称される賑わいをみせるようになる。中世社会は難波津（渡辺津）を中心とする経済都市と四天王寺を中心とする宗教都市へと変貌して

いく。

そして明応 5 年（1496）、「虎狼ノスミカ、家ノ一モナク、畠バカリナリシ所（実悟老子『捨塵記』）」であった上町台地北端部に、蓮如による石山御坊の建設が始まる。石山御坊、すなわち大坂本願寺は現在の特別史跡大坂城跡の地下にあるとされ、その詳細はよくわかっていない。上町台地北部の発掘調査では、本願寺期の V 字溝など、防御性に富んだ区画施設が検出されおり、周辺に寺内町を発展させていったようすをうかがうことができる。

織田信長との石山合戦を経て、本願寺は天正 8 年（1580）に紀州鷲ノ森へと移り、その直後に大坂本願寺は焼亡する。その後、天正 11 年（1583）に豊臣秀吉によって、大坂城の築城が開始する。難波宮跡周辺は慶長 3 年（1598）に造成された三ノ丸および惣構に位置し、これまでの発掘調査でも、豊臣期の堀や塀、屋敷跡、金箔瓦などが見つかった（図 18）。国産陶器や輸入陶磁器類などが多量に出土しており、大名屋敷が軒を連ねる一帯であった。

#### 5) 近世（徳川期）

慶長 20 年（1615）の大坂ノ陣で勝利した徳川幕府は、松平忠明を大坂城主とし、元和偃武の時代を迎える。豊臣期大坂城の堀は埋め立てられ、惣構、三ノ丸は市街地へ解放される。惣構跡地には東町奉行所や大坂城代屋敷が置かれ、徳川期を通じて与力や同心などの武家屋敷が並んでいた（図

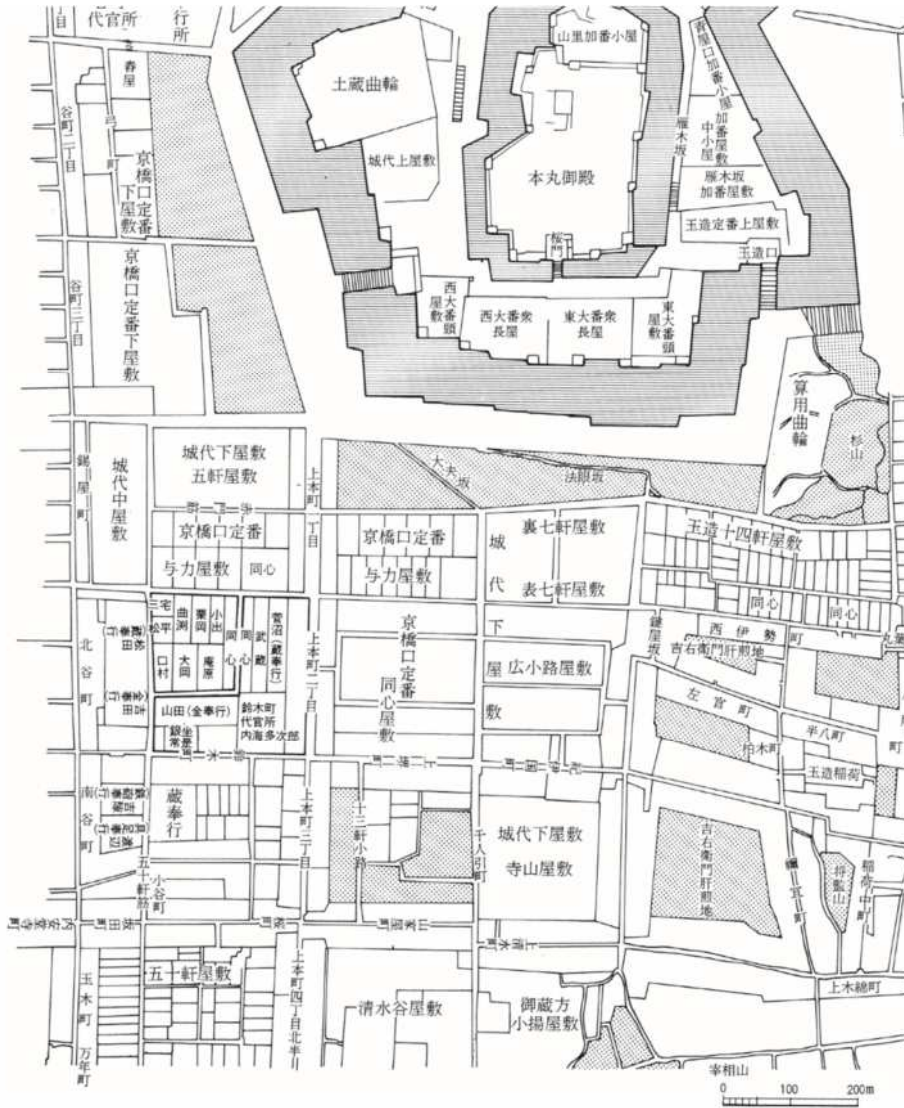


図19 幕末徳川期の難波宮跡一帯 矢内昭氏作図文久4年(1869)『上町東天満巽辺図』  
(大阪市文化財協会 1984)

19)。大阪歴史博物館・NHK大阪放送会館周辺は谷町筋に沿った街区が形成され、「阿部備中守下屋敷」、「松平因幡守下屋敷」などの歴代城代屋敷が置かれた。難波宮跡公園や上町筋を挟んでその西に位置する国立病院機構大阪医療センター周辺は、「鈴木三郎九郎」(大坂代官)、「八木庄兵(衛)」(御金奉行)などの機関が置かれていた。大阪医療センターの発掘調査では食膳具のセットが多量に長期間にわたって廃棄された土壌や、焼塩壺蓋・身のセットが多量に出土する土壌が検出されている。一般の町屋とは異なり、代官所・奉行所といった当該地の性格を反映しているといえる。

## 6) 近代

慶応3年(1867)の大政奉還、明治元年(1868)の鳥羽伏見の戦い、大坂城落城を経て明治時代を迎えると、上町台地北端部には学校や軍隊などの公的機関が置かれるようになる。大坂城周辺の幕府に関する屋敷は撤去されたり、転用されたりしている。

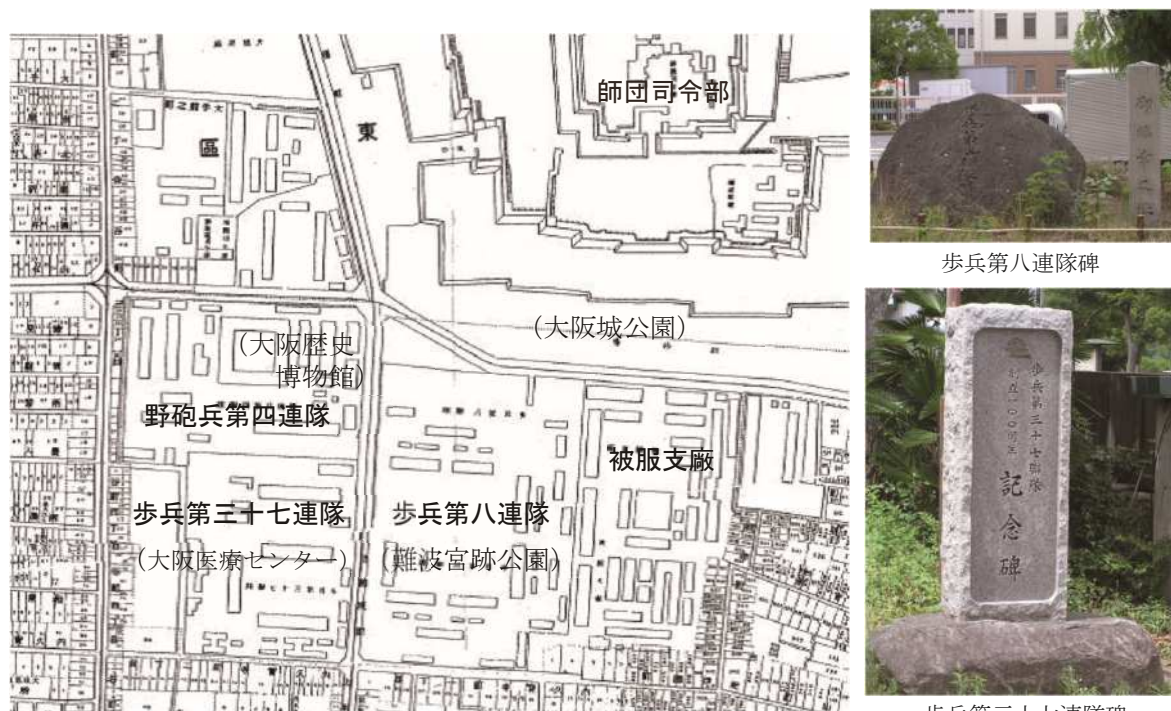


図20 昭和6年(1931)の『5千分の1大坂市図』(大阪府作製に加筆)と記念碑

学校・教育機関については、慶応4年(1868)7月、幕府の洋学教育機関であった開成所が江戸から大阪へと移され、官営の理科学研究機関である舎密局(大阪府指定史跡)となり、明治2年(1869)に洋学校が設けられる。同じく明治2年には上本町大福寺にあった浪華仮病院を移転させ、現在の大阪医療センターの場所に、大阪府病院および医学校が開設された。

軍事施設関連では、明治4年(1871)には兵部省官制改正のもと大阪鎮台が設立された。明治7年(1874)には、大手前から法円坂北部の内裏、朝堂院が所在する場所に、陸軍歩兵第八連隊の兵営が置かれた。中庭であった広場に、当時の庭木(高木)が残っている。また西側の上町筋沿いの場所に、第八連隊の名を刻んだ石碑が残されている。明治29年(1896)には歩兵第三十七連隊が設立され、現在の大阪医療センターが所在する敷地に兵営が置かれていた。また現在大阪歴史博物館、NHK大阪放送会館が建設されている敷地には野砲兵第四連隊が、また歩兵第八連隊の東側の敷地には被服支廠が置かれた(図20)。

このように、難波宮が広がっていた一帯は、軍用地として終戦まで利用された。周辺の調査では大型の塹壕や防空壕、小銃・軽機関銃、文書類も出土している。1トン爆弾(空襲の不発弾)などが見つかることもありその性格を反映している。